



学会の会員動向に思うこと

越地 耕二*

学会のアクティビティは大会やシンポジウムなどの発表件数や参加者数がバロメータになっている。発表件数や参加者数は第一線の中堅技術者・研究者の正会員数および学生会員数に比例している。

当学会の会員数動向をみると、平成12年の2,685名から漸増し、平成19年には2,983名となったが、その後は漸減し、平成22年には2,596名（13%減少）まで落ち込んだ。この傾向は他の多くの学会でも同様であり、この10年の間に、例えば電気学会では25,000名から20,000名（20%減少）に、電子情報通信学会は37,000名から27,000名（27%減少）に減少した。この減少は、大部分は企業に所属する会員の退会によるものであり、この間の経済情勢の影響を大きく受けている。さらに、昨今の円高の影響も相まって、生産拠点の海外移転が拍車をかけ、エレクトロニクス実装に従事する国内の企業技術者人口も減少していく方向にある。このような状況下では会員の退会を食い止めるのはなかなか難しい。

一方、当学会では、大学教員の会員数は絶対数は少ないものの平成12年に95名であったのに対し、平成22年には2.5倍の223名に増加している。また、学生会員は平成12年には51名であったのに対し、平成22年には4倍強の213名に増加している。ちなみに他の学会ではこれらの会員数は横ばい状況である。

そもそも大学教員や学生が学会に入会する動機は、大会や研究会での口頭発表、あるいは学会誌への論文投稿が機会になっている。当学会の大学教員や学生会員数のこの順調な伸びは、当学会が大学をはじめとする学界から学術団体として年々高く評価されるようになってきたからにはほかならない。しかしながら、当学会の大学教員の正会員数223名は全正会員のうちのわずか9%にすぎずであり、当学会の存在や活動がエレクトロニクス実装関連の分野を専門としている全国の大学教員・研究者に対してまだまだ十分に知られていないためと思われる。今後、全国の大学教員・研究者に対する入会勧誘キャンペーンを積極的に展開することにより、当学会はさらに会員数の増加が期待できる。

また、学生会員数も順調に伸びているとはいえ、学生会員の卒業・修了にともなう正会員への変更手続き数は毎年10名未満であり、きわめて低い定着率である。当学会では若い技術者向けに入門講座や教育講座は開催しているが、学生会員を対象とした行事は筆者の知る限り見当たらない。したがって、学生会員にエレクトロニクス実装の技術や将来の職業としての魅力は十分に伝わっていない。であるとすれば、エレクトロニクス実装産業の将来を担う若い技術者は育たない。少しでも多くの学生会員にエレクトロニクス実装の魅力を知ってもらい、将来の職業として選択してもらうためには、例えば、日本電子回路工業会や実装関連工業会、当学会賛助会員企業などに協力をお願いし、「エレクトロニクス実装業界・企業研究セミナー」や「エレクトロニクス実装技術見学・体験ツアー」などの種々の学生会員向けのイベントやサービスを企画、開催し、エレクトロニクス実装技術の魅力や仕事内容をよく知ってもらうことが必要である。当学会のこのような活動は学生に対するキャリア支援教育であり、社会貢献活動の一環にもなる。

地道ではあるが、このような活動により、エレクトロニクス実装を職業として選択する学生が少しでも増えて、多数の若い優秀なエレクトロニクス実装技術者が育ち、産業界および当学会がさらに発展、活性化することを願って、巻頭言としたい。